

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 2 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531187

研究課題名(和文) パフォーマンス評価を導入した美術鑑賞教育の協働実践的方法論の開発

研究課題名(英文) The Research on the Collaborative Practice Project on Appreciation and Learning Through Performance Assessment

研究代表者

濱口 由美 (HAMAGUCHI, YUMI)

福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号：80588559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：教師としての資質や能力を育むための美術鑑賞教育の協働実践的方法論の開発に取り組んだ。実践コミュニティや逆向き設計を活用したパフォーマンス評価を導入した鑑賞学習プロジェクトは、立場や専門性の異なる他者との開かれた協働探究の評価活動の場を生みだし、自らの実践を再構成していくための省察的探究プロセスをもたらせることを明らかにした。鑑賞学習プロジェクトにおいて、子どもたちと「学習発表会」の場をつくり出すパフォーマンス評価を導入したことで、学習評価を「探究や学習を促進するための道具」や「目標と学習そのものを問い直す道具」として活用する探究プロセスが実現されることを確認した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to propose a methodology for the collaborative and practical research on art-appreciation education to foster the qualities and abilities of teachers. This study has elucidated that the "appreciation-learning project" that utilized the performance evaluation of the practice community and the "reverse design", provided the place for the activities to evaluate the open collaborative inquiry with others whose position and expertise differed, thereby engendering the process of reflective inquiry for the purpose of re-configuring one's own practice. The "appreciation-learning project" has confirmed that by introducing the performance evaluation that created a place for the presentations of what had been learned with the children, the exploratory process was realized, one that utilized the learning assessment as the "tool to promote explorations and learning" and as the "tool to reconsider learning and its goals."

研究分野：美術教育学

キーワード：教員養成 パフォーマンス評価 美術鑑賞教育 実践コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

(1) 教員養成における課題

『今後の教員養成・免許制度の在り方について(2006・中央教育審議会答申)』や『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上対策について(2011・中央教審特別部会審議経過報告)』では、教員に求められる資質や能力が問い直されるとともに、「大学での養成段階は、教師としての最小限必要な資質能力を身に付けさせる段階であり、学校の実体やニーズも踏まえた資質能力の育成を含め、カリキュラム編成や成績評価の改善・充実を図る」といったことが教員養成系大学の重要課題として示された。

このような教員養成課程の課題に対し、本研究は現実の教科指導における課題と向き合い、それらを多様な実践者たちと協働しながら解決していく学びのプロセスをつくりだすパフォーマンス評価を導入した美術鑑賞教育の協働的実践研究の方法論を提案しようとするものである。

(2) 鑑賞学習の実践的研究における課題

学習指導要領の改定にともなって、自分なりの意味や価値をつくりだしていく学習が重視されるようになってきた図画工作科や美術科の美術鑑賞教育では、言語活動の充実を図るといふ命とも折り重なり、話し合いや批評活動を取り入れた鑑賞学習の教材開発が急速に進められてきた。その結果、A.ハウゼンやM.パーソンズなどの鑑賞能力発達理論やE.フェルドマンの階梯的批評メソッドを踏まえた学習方法が、日本でも発展的に開発され、美術鑑賞教育の普及に貢献してきた。しかしながら、子どもの学びの様子が作品の制作プロセスとして可視化されやすい表現活動に比べると、鑑賞活動は一人一人の思考プロセスをどのように捉えていけばよいのか分からないといった評価に関する課題などが浮上している。このような課題が生じる背景には、現在の美術鑑賞学習の研究がまだまだ発展途上であるため、研究の方向性が教材開発や方法論に傾斜し、その理論的背景は前述の海外研究者ら発達理論に依拠しているといった実態がある。本研究は、このような美術鑑賞学習の課題に着目し、その課題解決のプロセスを実践者(幼・小・中学校教員・美術館学芸員)たちと共有することができる鑑賞学習PJの開発に取り組む。

(3) これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

申請者は、2010年3月まで、公立小学校の教員として、地域や美術館との連携をベースとした鑑賞学習の実践的研究に取り組んできた。その一方で、2003年から、徳島県立近代美術館の鑑賞教育推進PJに携わり、多様な鑑賞学習教材を開発するとともに、鑑賞教育の普及活動にも従事してきた(濱口・森・竹内、『鑑賞シートと美術館の活用本』、

2011年)。このような経験と環境を活かし、2005年から学校教員を対象とした鑑賞学習授業研究会を発足させ、毎年2~4回の実践報告会やワークショップを開催してきた(濱口、「鑑賞学習を推進するための授業研究会への提案」、2011年)。そのような活動を通して、多くの学校教員が、鑑賞活動は子どもにとって観察力・判断力・多様な価値の認知などを促す学びの場になるということを経験的に理解しながらも、そういった子どもの具体的な学びをどのように評価していけばよいのか分からないという共通の課題を抱えていることが分かってきた。そこで、2011年に、徳島県立近代美術館や福井大学に於いて、小・中学生の鑑賞学習成果物を基にしたグループモデレーション活動などを取り入れた協働的実践研究のワークショップに取り組んだところ、評価活動を通して教師たちが自らの子ども観・教材観・指導観を交流させ、互いの評価観を鍛え合ったり、互いの課題に寄り添ったりしている学びの場となっていることに気付いた。

このような経緯から、教員養成課程においても、実践者同士の子どもの観・教材観・指導観等が交流できるパフォーマンス評価の場を導入した鑑賞学習PJを開発しその教育的有効性を検証すれば、実践場面の多様な課題に対し創造的に対応できる力をもった教員を養成していくための美術鑑賞教育の協働的実践研究の方法論として、提案することができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、教師としての資質や能力を育成することのできる美術鑑賞教育の協働的実践研究の方法論を提案するために、次の3点を研究目的とした。

(1) 実践コミュニティ(学生・教員・研究者)を活用するパフォーマンス評価を導入した「低学年図画工作」の授業構造の整理と検討を行い、鑑賞学習PJの実際を明らかにする。

(2) 先行研究からパフォーマンス課題づくりの基本的な考えを導き、これまでに取り組んできた学生作品を用いた出前授業による鑑賞学習PJのパフォーマンス評価について整理と検討を行う。

(3) 鑑賞学習PJに、子どもたちと「学習発表会」の場をつくりだすパフォーマンス評価を設定することの教育的可能性を、教職の専門性を促す評価観(省察的探究や批判的省察)から考察する。

3. 研究の方法

(1) 平成24年度は、実践コミュニティを活用したパフォーマンス評価を導入した低学年図画工作(保育内容の指導法に関する科目)の評価授業構造について、実践コミュニティ

の手引書となる『コミュニティ・オブ・プラクティス』(2002、Wenger)を用いて整理と検討を行った。幼稚園での出前授業実践がどのようなものであったのか観察記録等を用いて再構成するとともに、学生たちがどのような実践コミュニティを活用し、どのようにして幼稚園児のための鑑賞題材を開発し鑑賞学習を実現させ、自らの実践を捉え直してきたのかを学生の実践報告書等から明らかにした。

(2)平成25年度は、先行研究(2012、松下他)から、パフォーマンス課題の設定に至るまでのプロセスとその課題を検討し、「逆向き設計でFTSと対応させる」「教科専門科目で制作した学生作品を用いる」といったパフォーマンス課題の設定に際しての基本的な考えを導き、学生作品を用いた対話型鑑賞の出前授業を踏まえた二つの鑑賞学習PJの実践に取り組んだ。実践後、二つの鑑賞学習PJにおけるパフォーマンス課題とパフォーマンス評価がどのようなものであったのかを明らかにした。さらに二つのパフォーマンス課題から、どのような探究プロセスが生まれ、学生たちはそのプロセスをどのように振り返り、捉え直し、新たな探究をデザインしてきたのかを考察した。

(3)平成26年度は、福井大学教員養成スタンダード(以下FTSと記す)の背後にある評価観を探り、省察的探究プロセスを生み出すパフォーマンス評価の指針を導いた。

鑑賞学習PJにおいて、子どもたちと「学習発表会」の場をつくりだすパフォーマンス評価を設定すれば、FTSの評価観が活かされた省察的探究プロセスが生まれるのではないかといった仮説を立て、鑑賞学習PJ『おしゃべり展覧会をひらこう』の実践に取り組んだ。おしゃべり展覧会PJにおけるパフォーマンス評価がどのような場であったのかを可視化するためのドキュメンテーションを作成し、さらにFTSの評価観を用いて分析した。学生の活動報告書を用いて、学生たちが個々の省察的探究プロセスをどのように表現しているのか、自分が取り組んできたことの意味を問い直す場へと発展させているのかについて解釈的に考察した。

4. 研究成果

前述の「研究の目的」に沿って成果を述べる

(1)実践コミュニティ(学生・教員・研究者)を活用するパフォーマンス評価を導入した「低学年図画工作」の授業構造

低学年図画工作は、実践コミュニティの三つの基本要素(一連の問題を定義する領域・領域に関心をもつ人々のコミュニティ・共通の体験知)が有機的に絡んだパフォーマンス評価が設定されていたことを明らかにした。

学生Tは、幼稚園教員らとの実践コミュニティを活用したことで、幼稚園児たちの活動の見取りについての理解や解釈を深め、[5歳児の「見る」]や[5歳児のための鑑賞方法]について多面的に振り返り、子どもの鑑賞行為に意味づけをしていることを考察した。これらは、実践コミュニティを通して形成された多義的で重層的な「実践的な知」であり「協働の知」と捉えた。

実践コミュニティを活用した振り返りは、出前授業の課題を評価するための学び合いだけでなく、互いの知識を開発し合う役割も担っていることを明らかにした。実践報告書には、このような振り返りの場を通して編まれてきた「物語知」が、学びの足跡として記されていることを考察した。

(2) 学生作品を用いた鑑賞学習PJにおけるパフォーマンス評価の整理と検討

逆向き設計でFTSと対応したパフォーマンス課題を設定することにより、教師になるにあたって目指していく目標と、その目標に向かって行われた学習の成果を評価共有していく探求プロセスが生まれることを確認した。

教科専門で制作した学生作品を活用した出前授業をパフォーマンス課題として設定したことで、立場や専門性の異なる他者(他大学の学生・県内外の教員・研究者)との開かれた協働探究の評価活動の場が生まれた。異なる他者との協働探究は、自分の実践を再構成していくための認識フレームを手に入れたり、「問い」を表出させたりする力を育むことを考察した。

(3) 鑑賞学習PJに、子どもたちと「学習発表会」の場をつくりだすパフォーマンス評価を設定することの教育的可能性の検討

遠藤(2014)の論考を基にFTSの背後にある評価観を明らかにし(次頁:表1)、省察的探究プロセスを生み出す指針として、評価を「探究や学習を促進するための道具」や「目標と学習そのものを問い直す道具」として活用していくこととした。

子どもたちと「学習発表会」の場をつくりだすパフォーマンス評価を設定することで、多様な人に開かれた評価の場を設定することが可能であり、FTSの評価観が活かされることを考察した。

おしゃべり展覧会PJで設定した7つのパフォーマンス評価についてドキュメンテーションを作成し、それぞれの評価が、学生たちによって「探究や学習を促進するための道

具」として、あるいは「目標と学習そのものを問い直す道具」として活用されていたことを確認した。

学生 T の実践報告書には、自らの実践と出会い直し、まとめ直し、その意味を問い直す省察的な探究のプロセスが表現されていること考察した。

表 1 FTS の背後にある評価観

真正の評価	現実世界で直面する課題に取り組みさせる中で評価を行う。能力を個人が所有する文脈独自のな実体として捉えるアプローチは採らない
学習としての評価	評価に向けた取り組み自体も学習として位置付けるというアプローチ。学習を行うのは他でもなく学習者本人であり、学習者こそが学習の最終的な責任をもつべきである。それ故、評価への学習者の参加は不可欠
目標に捉われない評価	実際に起こった出来事に真摯に向き合い、設定されていた目標や学習の在り方自体も問い直す
省察的探究	自分たちが取り組んできたことをふり返って、その意味を問い直す際に、自分の思考の習慣を問い、実践での認識の仕方を問い、自分が置かれている状況を問うこと
批判的省察	自分が置かれている状況を客観視し、他の可能性を探り、自分が行った判断の根拠や基準を吟味し、自分が取り組んでいることの意味を問い直す

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) 濱口由美、パフォーマンス評価を導入した美術鑑賞学習の協働的実践プロジェクトの研究 - 「おしゃべり展覧会をひらこう」プロジェクトの実践を通して - 、大学美術科教育学会誌美術教育学、査読有、47 号、2015 年、271-278 頁

(2) 濱口由美、パフォーマンス評価を導入した美術鑑賞学習の協働的実践プロジェクトの研究 - 美術科教育法の質的転換を目指すパフォーマンス課題の検討を通して - 、福井大学大学院教育学研究科教師教育研究、査読無、第 7 号、2014 年、259-268 頁、<http://repo.flib.u-fukui.ac.jp/dspace/bitstream/10098/8405/1/AA12470517-07-018.pdf>

(3) 濱口由美、実践コミュニティを活用した教員養成課程の授業研究 - 保育内容の指導法に関する科目「低学年図画工作」の実践から - 、大学美術教育学会誌、査読有、45 号、2013 年、311-318 頁

〔学会発表〕(計 3 件)

(1) 濱口由美、大橋武史、「パフォーマンス評価を導入した美術鑑賞学習の協働的実践プロジェクトの研究 - 異文化理解型鑑賞学習プロジェクトの実践を通して - 」、実践研究福井ラウンドテーブル 2015 (ZoneB フォーラム) 2015 年 2 月 28 日、福井大学教職大学院

(2) 濱口由美、「ART APPRECIATION FOR COMMUNICATION - Let ' s enable the participants to engage in the exchanges of their experience in " seeing "」、第 15 回フレネ教育者国際会議、2014 年 7 月 22 日、於: Reggio Emilia Loris Malaguzzi 国際センター

(3) 濱口由美、2012 年、学生と教員の協働的な学びの場を創出する「低学年図画工作」の授業構造 - 出前授業型プロジェクトの実践と検証 - 、大学美術教育学会、2013 年 10 月 21 日、大分大学

〔図書〕(計 4 件)

(1) 濱口由美監修、『START LINE』、福井大学教育地域科学部芸術・保健体育コース美術サブコース、2013 年 3 月

(2) 濱口由美監修、『START LINE 2 - 批判的に吟味し、理論化していくプロセスをつくる学習個人誌』 - 、福井大学教育地域科学部芸術・保健体育コース美術サブコース、2014 年 2 月

(3) 濱口由美監修、『START LINE 3 - 実践の足跡から意味を見出し、希望を拓く学習個人誌』、福井大学教育地域科学部芸術・保健体育コース美術サブコース、2015 年 2 月

(4) 濱口由美監修、『START LINE 4 - 上海で見つけた、私たちの「異文化理解」 - 』、福井大学教育地域科学部芸術・保健体育コース美術サブコース、2015 年 3 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱口由美 (HAMAGUCHI YUMI)
福井大学・教育地域科学部・教授
研究者番号: 80588559

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

竹内利夫 (TAKEWUCHI TOSHIO)
徳島県立近代美術館・学芸員
大橋武史 (OHASHI TAKESHI)
福井大学教育地域科学部附属小学校教諭